

九州産業考古学会報

第30号 2020年5月11日発行 発行元：九州産業考古学会

中間全国大会のお礼と本文提言のご案内

伊東 孝 ((一社) 日本イコモス「技術遺産小委員会」主査)



(写真：上岡弘和氏撮影)

九州産業考古学会のみなさまには、昨年秋、中間全国大会でお世話になったお礼を申し上げます。総会、全国大会、それぞれ内容の軽重はありますが、個人的には懇親会での情報交換やプレ・ツアー、見学会が楽しみです。中間全国大会では、堀川沿いを歩いたのが、一番印象的でした。堀川と河川との立体交差の仕掛けなど、場所々々に応じて見るべきものや気になるものがありました。圧巻は岩山の切通しとなります。ノミ跡や棒突き穴は説明がないと見落とします、とくに棒突き穴は。また河守神社の名称と配置、機能的意味、関係者の精神的あり方において、納得のいくものでした。(見学の目玉である遠賀川水源地ポンプ室は、以前見学したことがあり、今回は見学場所の整備などを確認できました。)

実行委員会の人たちの準備はたいへんだとは思いますが、地元の魅力を全国に発信する意味で、また産業考古学会の特徴を継続する意味で、この方針は、今後とも継続して行ってほしいと思います。

ここで「産業考古学会」といいましたが、4月10日から当学会は、(ご存じの方もいるとは思いますが)「産業**遺産**学会」に改名しました。問題提起があつてから2年半の討議を経て、決まりました。学術的な意味で、産業考古学という分野があるのは知っていますが、学会の過去の調査・研究論文をみると、「産業遺産学」の名称の方が、実態的にはあつていると考えます。(他にも理由はあり、関心のある方は学会誌をご覧ください。)

あたらしい門出を迎えたという機会をとらえて、本会報次頁以下の本文中では「産業遺産学」の発展にむけて、少し問題提起をおこなっています。本来ならば、学会機関誌『産業考古学』(学会誌名が変わらなかったことは個人的には不本意ですが)に掲載すべき内容ですが、書きたいことを書いてよいというお許しがでたので、コロナ・パンデミックで生まれた時間を利用して、お言葉に甘えさせていただきました。

【提言】

産業遺産学の進化と活性化へ向けて

伊東 孝 ((一社) 日本イコモス「技術遺産小委員会」主査)

1. はじめに

産業遺産学を発展させるには、会員をふくめ一般の人たちが、「面白～い!」「感動したっ!」というような体験をしてもらうことが大切です。しかしここでは、主に研究面を深化させる意味で、「産業遺産学の進化・発展」ということを考えたいと思います。「産業遺産学の進化・発展」と固い言葉でいっていますが、要は、調査・研究して、すなおに面白い、興味がわく、でよいと思います。若いころは、「研究とは、社会的・学術的に意味や意義があるものでなければならぬ」と考えていましたが、途中から変わりました。(この経緯は省略)

したがってこれから書くことは、「産業遺産学を面白くするには、どうすればよいのか」の提案です。基本的な視点は、今年の『産業考古学』(157号)に書いていますが、今回は、それに関連する具体例の紹介と、多少の裏話を紹介して、さらなる問題提起とします。

2. Reconstruction—藤原京と平城京

最近の日経新聞に興味深い記事がのっていました。「天守復元しやすく／文化審が基準緩和／不明確な部分、明示すれば許可」(2020.4.18)。見られた方も多いと思います。「史跡の魅力を高め観光資源としての活用につなげる」ために、新基準を決めました。これを推進するには注意しなければいけないこともありますが、基本的な方向として個人的には賛成です。

最近まで学術的に裏付けのない復元は、やってはいけないと思っていました。しかし従来のような文化庁的な復元のあり方は、

ヴェニス憲章にある「復元は、アナスタイローシスに限る」といわれた内容を、教示的にとらえた、ないしはかたくなに解釈しすぎたものではないか、と思うようになりました。

これについては、学会誌第157号の159ページでも、次のように指摘しました。

日本では復元は、平城京の朱雀門のように社会的事業としておこなわれることはあっても、学問として語られることはなかったといわれる。なぜかといえば、ヴェニス憲章では、復元について強く禁止していたからである。「復元工事は、いっさい理屈抜きに排除しておくべきである」(ヴェニス憲章第15条)。認められていたのは、アナスタイローシス(現地ではばらばらに残っている部材を組み立てること)のみであった。このことが、復元の議論を封じる一因であった。

今回の文化審議会の決定では、調べつくした結果、資料がなければ、わからない部分は推測して復元することもありとした。ただしそれには、必ず説明を入れておくという前提で。これを「復元的整備」と定義し、史実に忠実な従来の「復元」と区別したとあります(建造物的な表現では、「復原」となる)。しかし「復元的整備」には、後に提案する芸術的・環境オブジェ的な整備までは考えてないのではなからうか。だが、研究的・環境的なあり方として考えるのも、一考だとは思う。これは、今日の行政的なあり方としては、不可能としても、産業遺産学として検討することはあってよいと思う。これを、「創造的復元整備」と呼んでおきます。一例として、藤原京と平城京との

創造的復元事例について考えてみます。

昨年(2019)の12月、日本イコモスの理事会が奈良で開催されたとき、藤原宮跡と平城宮跡を見学しました。藤原宮跡では、朱塗りの短い列柱が復元的に立っていること、平城宮跡には朱雀門が復元されているのは、知っていましたが、現地で朱雀門を見たのははじめてでした。二つの復元事例をみて、すなわち朱雀門の方がわかりやすいと思いました。不明な点があるとしても、復元物があると、形や規模がわかるとともに、デザインや大きさなども実感できます。案内の人からは、土地の購入から復元する際の細かな調査までの苦労話も聞きました。平城宮跡については学生のころ、近鉄電車の検車庫建設問題で保存運動があったことを思い出します。それから半世紀余り、今日があります。

計画はさらに続き、近くにある工場も移転する予定と聞き、また朱雀門の後ろを通る近鉄線も路線が変わって地下化することを聞きました。これは、国土交通省による(国営公園)平城宮跡歴史公園の一環として敷地内を横切る近鉄奈良線の移設計画です。あわせて奈良県道の移設も検討されています。いまや文化財関連の整備は、省庁横断的におこなわれるようになりました。

個人的には、たまに通る近鉄の列車も、朱雀門とのアンバランスが面白いと、無責任にも思ってしまいましたが、復元という方針を立てたからには、原則(建前)を守り抜くというのは、協力者や社会に対する役所の矜持だなと思いました。

で、藤原宮跡はどうか。人の背丈を超える太い列柱が規則正しく並び(直径70cm×高さ180cm、18本、ウレタン製)、その意味はわかるとしても、芝生の植えられたただっぴろい平地の中に、ずんぐりむっくりした同じ長さの朱い列柱が並んでいる光景は異様で、いただけませんでした。しか

しここにも朱雀門と同じように大極殿の南門を復元するのは、コストをかける割には復元のあり方として問題があると思いました。復元したら、ひょっとしたら平城宮と藤原宮とが並立していたと思われるかも知れません。(ただし、藤原宮跡の復元計画は、現在のところ聞いていません。)

では、どのような案があるのか。藤原宮跡のただっ広い芝生地を公園的・広場的に利用させるだけではもったいないし、維持管理費も大変です。遺跡は土の下に保存されているので、遺跡に影響のないやり方で野外音楽祭や映画祭、イベントなどを開催、入場料などをもって、維持管理費にあてるのもありではないか、と思います。

抽象彫刻や環境オブジェとしての列柱群の復元を考える方策もあるのではないかと、思いました。柱の何本かは建物の柱の高さを復元し、場合によってはさらに色を変えた柱をのぼしてシビの高さを示すなど、全体としてはオブジェとしてデザインします。一目見たときは、巨大なオブジェと思わせ、近寄って説明板をみたら、実は意味がある、というような一種の創造的整備です。一部は礎石だけというものもあります。LEDを使ったり、ライトアップもあります。VRの技術が進歩すれば、小さな眼鏡をつけながら、宮跡内を歩き回れるかも知れません。そのときは当然、人とぶつからないような技術も開発済みという前提です。

社会的な注目を集める意味では、世界的なコンペにして、知恵を集める方法もあります。

三方が山に囲まれた盆地の中の飛鳥京は、空間的な広がりがありますが、藤原京と平城京は広さが実感できません。そこで提案したのは、年に一度のお祭りかイベントの時に、各京跡の四隅にバルーンをあげてみることです。すると京跡の中にいる人は、遠くに見えるバルーンを見て、京跡の広さ

を確認できる訳です。

以上のような復元案は、リバーシブルであることなどの条件が必要だとは思いますが、

いろいろ意見や提案はあると思うが、遺産を専門家や研究者だけを満足させるだけでなく、一般の人にも関心をもち、理解してもらうためにも、必要なことだと思います。

以上のような意見交換を、学会誌や全国大会などの場でできるようにすることも、他分野の人に関心をもちてもらおう意味で、また産業遺産学の研究領域を広げ、深める意味で必要なことだと思います。

産業考古学では、対象物の調査・研究を重視していたように思いますが、いまや産業遺産をどのように利活用していくか、に重点が移ってきているように思います。ないしは、利活用の方法や計画が求められている、といえます。その意味で、産業遺産学には、計画分野（論や学をふくむ）にも目配りする必要があると思います。

3. 未来の産業遺産を見抜く眼をもとう！

(1) 論文「草生水まつり」の狙い

学会誌第157号では「草生水まつり」について、柏崎市立博物館高橋深雪さんとの連名論文を投稿しました。ここでもまた、全国大会での申請手続きと同じように、査読者との意見相違がみられました。結果的には、査読者の意見を取り入れ、結局は本文の1/4以上をカットして掲載しました。

「草生水まつり」論文の狙いは、①無形の産業遺産研究の例示、②未来の産業遺産研究もありうること（それはひいては産業遺産を見抜く眼を養うことにも通じる）を、問題提起した内容でした。

ここでは連名論文が採用されなかったことへの不満を吐露することが目的ではなく、今後の産業遺産研究のあり方を考える意味で、事例を紹介しながら考えてみたいとい

う狙いで紹介するものです。

原稿内容に関して、以下の査読結果がきました。（○内数字は、整理の都合上付記しました。）

- ①産業遺産は、「…歴史的・技術的・社会的な評価を有するもの」で、将来の「地域の伝統や文化」に「なり得るもの」まで含む事ができるのか。
- ②50年後に「産業遺産」になり得るという評価によって、現在において「産業遺産」としてなぜ評価しなければならないのか。
- ③ソーラン、炭坑節、田植えなど産業活動に関わる地域活性化のためのイベントのすべてが「産業遺産」として評価される事になる。
これに対するわたしどもの回答は、次のようなものです。

第一に前提条件として指摘しておきたいことは、「遺産」に対する考え方（概念）が、査読者たちがついている点です。①の前半に、“産業遺産は、「…歴史的・技術的・社会的な評価を有するもの」とありますが、本稿では「遺産」は文字通り、「残されたモノ」というように、「評価や価値づけはなされていないモノ」と考えています。（TICCIHでも「産業遺産＝遺跡」とし、評価や価値づけはしていない。たとえばニージュニイ・タギール憲章。）したがって産業遺産は、「産業活動に関わって残されたモノ」となる。これが、歴史的・技術的・社会的な評価を得て、はじめて文化財や世界遺産になる。

それゆえ本稿では、当初「草生水まつり」として主催者の意図とは別に、単なるひとつのイベントとして始まったものが、何故、またどのようにして「地域の伝統」になり、やがては「地域の文化」になりうるのかを探ろうとしました。

この意味では、②にあるような“「産業遺産」として…評価”しているのではなく、

“産業遺産を調査分析”しているのです。もう少し詳しくいうと、すでに「地域の伝統」になり、やがては将来の文化財になると思われる“産業遺産を調査研究”しているのです。

また、なぜ評価しなければならないのか。われわれ調査研究者は、すでに文化財や（50年以上を経た）文化財条件を満たすモノだけを調査・研究すればよいのではなく、むしろ将来の文化財になり得るものを発見することや「見ぬく眼」をもつことも大切と考えます。過去の残されたモノや文献などを発掘するだけではなく、現在おきている事象にも目を向け、将来の文化財を創造することも大切と考えます。このことは、調査研究者の見識眼や観察眼を鍛えることにもつながります。

今回とりあげた「草生水まつり」は、今後、どのような経緯を経て「地域の文化」になるのか（または、ならないのか）の観察を（または地域と共同）し、そのプロセスを分析・確認したいと思う。これは筆者らの観察眼を鍛え、養うことにも通じる。

③については、本誌別稿の「産業遺産利活用の最前線」でも引用したニージュニータギール憲章（2003年）の言葉をもって、回答に代えたい。「産業考古学は、…有形・無形を問わず、（産業遺産の）すべての証拠を研究する…」（ ）内は筆者補充。

柏崎市の博物館では、毎年25年ぐらい経たもので展示的な価値のありそうなものを購入して、資料を蓄積しているそうです。それを25年後に展示する価値があるか否か、判断するわけです。50年たって価値あるものを購入するのは、お金もかかり、入手するのもたいへんだからです。

博物館学で習った「奈良、大和、三代」という言葉が好きである。価値を生み出す言葉を象徴している。奈良の骨董屋さんは三

代続かないと成り立たないというのだ。むかしの現役の一代は30年。三代、約100年続かないと骨董品の商いはできないというのだ。

ここには、いろいろな意味がこめられている。時が価値を生み出すこと。しかも100年、モノをいい状態で保存しておくことは、たいへんなことである。（わたしなどは、自分の蔵書も保存できない。）骨董品として商売するなら、コンセプト、目利き、心眼という要素も加わる。時代や考え方の変化などもあります。

研究者は、法律や役所で決められたことだけで評価するのではなく、法制度が完璧であるはずがないので、その問題点なり不備を見出し、あたらしい制度や遺産概念を提示できるような気概をもちたいものです。理想をいえば、世界遺産委員会についてももの言える研究者でありたいものです。

（2）学会やシニア研究者の責務

世界遺産委員会では、各国に「20世紀遺産20選」のリストアップを要求しています。文化庁でも「明治日本の産業革命遺産」の影響を受けて、2015年から近現代建造物緊急重点調査事業に取り組み、18年（平成30）年までの概要がホームページに掲載されています。実際、いつの年代のものまでが対象になったのかを土木構造物で見ると、なんと最近のものでは、2018年の砂防工事もとりあげています。

上述したように行政当局ですら、将来の文化財になりうるものの調査をしているのに、学会という名のもとに論文を査読する人たちが、過去のことにしか目が向かない現状を非常に危惧しています。

今回の投稿論文が査読を通らなかったことは是認するにしても、わたしどもとしてはひとつのイベントを成し遂げるためにスタッフの人たちがどのような苦勞を、また

関係住民や行政に気配りしながらイベントを継続してきたか、などを紹介・分析しました。うちの学会は、産業遺産の保存運動を支援することを、創立の趣旨に謳っている稀有な学会ですから、保存運動の研究は大切な研究課題のひとつです。しかしその肝心部分がカットされてしまいました。査読論文ならまだしも、「研究ノート」ですらカットです。これは、学会における、ある意味言論規制であり、自由な研究を妨げるものです。また議論の場や機会すら奪うものだといえます。

少し個人的なことを付け加えると、問題提起的な論文はシニア研究者がしなければいけない義務と考えます。若い人は、研究者の評価点になる査読論文を書かねばならない。同じ時間をかけるなら、通るか通らないかわからない論文を書くより、通る論

文を書く方が得策です。また学会からにらまれることもありません。あたらしい分野や研究対象を開拓し、またそのような兆候があれば、それに着目し、発展させるのは、わたしもシニア研究者の義務です。わたし自身は、もう定年になって査読論文を書いて点数を稼ぐ必要もありません。ではなんのために書くのか。学会活性化手段のひとつとして書いています。理事会で発言していても限界があるので、有言実行をかねて発表しています。

遺産研究は、保存・保護だけでなく、創造することも大切なのです。

以上の内容は、本来、産業遺産学会でいうべきものです。折角の機会をいただいたので、本文が「九州産業考古学会」の機関誌に掲載されたとき、うちの学会の理事会にアナウンスしたいと思います。



【研究発表】

鉄鉍滓煉瓦研究の虚実（ドイツ鉄鉍滓煉瓦調査より）

市原猛志（九州大学大学文書館／事務局）

1. はじめに

「鉍滓煉瓦」という構造材をご存じだろうか。日本においては官営八幡製鐵所を中心に生産され、北九州地域各所では現在でも鉍滓煉瓦造の建造物を見ることができる。代表的な建造物としては、かつて八幡東区枝光に建てられていた製鐵所本事務所（1990年解体）は鉍滓煉瓦造3階建ての官公庁舎建築であった。このほか北九州市八幡では市役所や製鐵所附属病院、旧制中学校や高等女学校、購買部施設など建築物の多くが鉍滓煉瓦で作られた。

2. ふたつの「鉍滓煉瓦」

本稿では、表題含めこの鉍滓煉瓦にわざわざ「鉄」の字を書き加え、あえてここか

ら「鉄鉍滓煉瓦」と表現する。なぜかというところ、日本国内においては、この鉍滓煉瓦という言葉で表現されるものが大きく分けて二種類あるからだ。

ひとつが銅鉍滓煉瓦、いわゆる「からみ煉瓦」と呼ばれるものだ。これは日本各地の銅山などで採掘された銅鉍石の精錬の際に発生した熔融銅鉍滓（からみ）を鑄造して作られるもので、比重的に重いことから、銅鉍山近隣あるいは硫酸などの化学製品生産現場などでよく見られる。後述する高炉スラグから作られる鉄鉍滓煉瓦とは硬化作用の点で異なる。現在でも英語では slag stone と表記することで、鉄鉍滓煉瓦 (slag brick) との使い分けが行われている。

もうひとつが鉄鉍滓煉瓦だ。詳しくは次

章で述べるが、ドイツにて高炉スラグが水を加えることで硬化する性質を持っていることが 1860 年代に発見され、これを活用する形で作られた組積材である。原材料は水滓高炉スラグと生石灰、そして若干の徐冷高炉スラグとを混合させ、煉瓦形状に加圧成形、2~3 ヶ月自然養生しポゾラン反応による硬化を待ち製品とする。

ここ日本国内においては、「鉍滓」を用いる組積材であることで、銅鉍滓煉瓦（からみ煉瓦）と鉄鉍滓煉瓦とが混同される状態となっている。同様に焼成作業を経ない組積材ながら、両者は、その製造プロセスが大きく異なる。本稿では、これらの混同を避けるために、本稿における調査対象物を鉄鉍滓煉瓦と表現している。

ちなみに、日本国内では徐冷高炉スラグの塊を石材代わりに用いる事例が北九州市八幡など製鐵所近郊で見ることができるが、海外諸国のように大規模構造物向け建築資材としてブロック形状に成形された事例を確認できておらず、銅鉍滓煉瓦のような大きさの、いわゆる「鉄からみ煉瓦」としての国内導入はなされなかったとみられる。

3. 鉄鉍滓煉瓦「開発」という伝説

この鉄鉍滓煉瓦は、官営八幡製鐵所で 1907 年より生産が開始された。北九州イノベーションギャラリーのウェブサイトや『新日鉄高炉セメント百年技術史』などが黒田泰造を開発者と記載している。

しかしながら、黒田はその生涯に遺した文献の中で、自らを開発者として述べたことはない。黒田は三好久太郎に「お世話になった」と、また三好が「八幡で、洗炭、(中略)耐火煉瓦、鉍滓煉瓦、高炉セメントを始められた」とも述べている¹⁾。

そもそもの話で、鉄鉍滓煉瓦は、日本国内独自の発明ではない。これは黒田自身も「ふりつつりゆるまん」の発明と明言して

いる²⁾。この人物は、いったい誰だろうか。

4. ドイツ鉄鉍滓煉瓦調査

鉄鉍滓煉瓦(ドイツ語:Hüttenstein)は、ドイツ・ニーダーザクセン州オスナブリュック郊外のゲオルグスマリエン製鐵所にて、1866 年に Fritz W. Lürmann (1834-1919) によって発明された。これが黒田の記載する「ふりつつりゆるまん」である。Lürmann は高炉技術者として著名で、官営八幡製鐵所の初期高炉群であった東田第一~四高炉は彼の設計によるものである。またドイツにおいては高炉鉍滓排出の際に鉍滓煉瓦の原材料である水滓を連続生成するスラグパイプの発明者として著名であった。

ドイツにおける Lürmann の事蹟を訪ね、2019 年 8 月にオスナブリュック及びケルン商工会議所アーカイブを訪問した。オスナブリュックは、Lürmann が個人事務所(写真 1)を構え、またこの地で逝去している。現地の資料館には、Lürmann の事蹟に関する資料はなかったが、鉄鉍滓を原材料としたからみ煉瓦の混構造の建物を見ることができた。



写真 1 Lürmann の旧事務所(現存)

また、ケルン商工会議所アーカイブ(写真 2)では、Lürmann の自伝を複写することができた。ここではスラグパイプの発明に関する記述や個人事務所として高炉の設計を委託され、日本の八幡村(Yawatamura)に高炉を建設したことが記されていた³⁾が、日本国内への鉄鉍滓煉瓦の技術移転に関しては特に記されていなかった。

ただし、近年の世界遺産登録に関する調査の一環で、同じくケルン商工会議所アーカイブ所蔵の GHH.資料から Lürmann の斡旋により服部漸がオスナブリュックの製鉄所に研修に赴いたことは確認⁴⁾されている。鉄鋳煉瓦の製造技術は創業前に服部や三好が留学実習を行った際に間接的に移出されたものと推定する。ドイツの資料から見ても鉄鋳煉瓦の国内技術導入者は黒田泰造ではないことになる。



写真2 ケルン商工会議所アーカイブ

5. 考察

前章で記載したように、鉄鋳煉瓦の発明者は、Fritz W. Lürmann であり、日本への技術導入に関しては三好久太郎が主導的な役割を果たしたと思われる。

黒田泰造は鉄鋳煉瓦を発明したわけではなく、官営八幡製鐵所への勤務2年目にその担当掛を任せられ、1934（昭和9）年まで主導的普及役として貢献した⁵⁾ことから、その貢献度から黒田と鉄鋳煉瓦が同一視されたものと思われる。その意味では鉄鋳煉瓦の生みの親、という表現には適さないまでも、「育ての親」と表現することが適切と言えよう。なぜ三好の名前が鉄鋳煉瓦と結びつかなかったかについては、これは三好が1911年に官営八幡製鐵所を退職していたことが大きく影響したと思われる。対外的にも退職した三好の名を鉄鋳煉瓦に直結させづらいことは容易に想像できる。また鉄鋳煉瓦の市街への普及は三好の退

職と前後して始まったことを鑑みると、このことが黒田泰造＝鉄鋳煉瓦の生みの親と混同されるきっかけとなったのではないか。

7. 結論と課題

最初の項目で述べたとおり、「鉄鋳煉瓦」と研究者が述べている場合、いわゆる「からみ煉瓦」と「鉄鋳煉瓦」とを混在している危険性が高い。両者は組積造構造物としてのサイズや重量のみならず、その作り方や特徴も異なっている。本稿では鑄造によって作られる煉瓦形状の組積材を「からみ煉瓦」とし、石灰を刺激剤とするポゾラン反応によって硬化する特性を持った組積材を鉄鋳煉瓦、または商品名の「鉄鋳煉瓦」として表現を使い分け、素材の混同を防ぐ必要がある、と提唱したい。

また、これまでの章で述べたように、鉄鋳煉瓦の発明者は Fritz W. Lürmann であり、黒田泰造はその普及に貢献したと考えるべきである。問題は国内への鉄鋳煉瓦技術の導入における Lürmann の関与度がどれほどであったのかということであるが、これについては、今後の海外調査の中で資料収集を重ねながら少しずつ明らかにしていきたい。

謝辞

本研究は科学研究費助成金（17H04728）の助成を受けた。調査前後でお世話になった関係者各位に感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 黒田泰造「八幡製鐵所の思い出」『八幡製鐵所化工部概史』八幡製鐵所化工部、1961、p.48
- 2) 黒田泰造「鋳鉄炉鋳煉瓦ノ利用及鋳煉瓦ノ話」『製鉄研究』製鐵所、1911、p.57
- 3) Lürmann, Fritz W. “Lebensbeschreibung des Hütteningenieurs”, 1919, p.34
- 4) 調査報告書『国家を越える環境下での技術移転』北九州市、2017、p.79
- 5) 『黒田泰造 その業績と人柄』黒田さん記念会、1966、p.1

【記念企画】

九州産業考古学会報 21～30号総索引

会報 21号から今 30号までの記事総索引を作成した。ここ 5年の、とりわけ「明治日本の産業革命遺産」世界遺産登録前後における九州各地の、または世界の動きを知る一助になれば幸いである。

□各号別索引□

第 21号 2014年11月1日発行

【巻頭言】

産業考古学の魅力 …………… 尾崎徹也 1

【報告】

平成 26 年度総会 …………… 砂場一明 2

三池炭鉱施設群見学会 …………… 藤木雄二 2

「産業遺産国際会議」報告 …… 市原猛志 5

【書籍紹介】

馬場明子著『筑豊 伊加利立坑物語』
…………… 木元富夫 5

【お知らせ】

今後の予定 …………… 6

会費納入・ご寄付のお願い …………… 6

第 22号 2015年5月19日発行

【巻頭言】

『熊本の近代化遺産』熊日出版文化賞受賞
に寄せて …………… 磯田桂史 1

【報告】

対馬の近代軍事遺跡見学記 …… 砂場一明 2

「明治日本の産業革命遺産」ICOMOS 登
録勧告に接して …………… 市原猛志 5

九州産業技術史研究会紹介 …… 市原猛志 6

【書籍紹介】

後藤惠之輔著『新長崎ことはじめ』
…………… 木元富夫 7

【お知らせ】

今後の予定 …………… 8

会費納入・ご寄付のお願い …………… 8

第 23号 2015年11月11日発行

【巻頭言】

近代化遺産で先祖を思う …… 時里奉明 1

【報告】

平成 27 年度総会・見学会 …… 砂場一明 2
TICCIH Lille Region 2015 参加報告
…………… 市原猛志 6

【書籍紹介】

園部利彦著『日本の鉱山を巡る（上）』
…………… 木元富夫 7

【お知らせ】

今後の予定 …………… 8

会費納入・ご寄付のお願い …………… 8

第 24号 2016年1月15日発行

【巻頭言】

産業考古学と世界遺産 …… 山田元樹 1

【研究発表】

明治日本の産業革命遺産の世界遺産記載ま
での備忘録—旧三池炭鉱における地域在住
研究者の視点より— …… 永吉 守 2

【書籍紹介】

田中滋幸著『九州の百年企業』
…………… 木元富夫 6

【お知らせ】

産業考古学会創立 40 周年記念「近代化遺
産」シリーズ講演会・シンポジウム …… 6

「明治日本の産業革命遺産」関連情報 …… 7

今後の予定 …………… 8

会費納入・ご寄付のお願い …………… 8

第 25号 2016年9月10日発行

【巻頭言】

「ヘリテージング」のススメ！ …… 稲田 毅 1

【報告】

平成 28 年度総会 …………… 砂場一明 2

佐賀地区見学会 …………… 尾崎徹也 3

筑豊鉱山学校・筑豊工業高校所蔵資料紹介

……………松田 寛	5
【お知らせ】	
九州産業考古学会見学会 in 大分	6
しめの文化財ウォーク	7
【書籍紹介】	
『福岡地方史研究』第53号	7
【お知らせ】	
今後の予定	8
会費納入・ご寄付のお願い	8

第26号 2018年1月15日発行

【巻頭言】	
小説の舞台を歩く	1
【研究発表】	
南薩鉄道の鉄道遺構について－上日置駅跡 周辺の調査結果－	5
成田浩・中原昌一・堀田和弘・大田治彦	
【報告】	
平成29年度総会	6
大神回天基地跡、宇佐海軍航空隊跡見学会	7
尾崎徹也	
【書籍紹介】	
黒沢和義『写真と証言でよみがえる 秩父鉦 山』	7
木元富夫	
【お知らせ】	
今後の予定	8
会費納入・ご寄付のお願い	8

第27号 2018年6月10日発行

【巻頭言】	
九州産業考古学会の魅力－現地見学会	1
……………長妻靖彦	
【研究発表】	
南薩鉄道の鉄道遺構について－上日置駅跡 周辺の調査結果(続報)－	2
成田浩・堀田和弘・中原昌一・大田治彦	
【報告】	
松浦地域炭鉦跡・松浦市立埋蔵文化センタ ー見学会	6
……………尾崎徹也	
【お知らせ】	
平成30年度総会	8

【書籍紹介】	
林えいだい『《写真記録》これが公害だ』 (復刻版)	8
……………木元富夫	
【保存要望】	
旧安川家住宅「洋館棟」の保存に関する要 望書	9
……………	
【お知らせ】	
今後の予定	10
会費納入・ご寄付のお願い	10

第28号 2019年6月10日発行

【巻頭言】	
九州産業考古学会総会の開催を歓迎	1
……………前蘭廣幸	
【報告】	
韓国炭鉦事情寸感	2
……………木元富夫	
【お知らせ】	
令和元年度総会について	4
【書籍紹介】	
安蘇龍生『筑豊《石炭と人々の生活》』	4
……………木元富夫	
【お知らせ】	
産業考古学会2019年度全国大会(中間 市大会)参加のお願い	5
……………	
今後の予定	6
会費納入・ご寄付のお願い	6

第29号 2019年10月20日発行

【巻頭言】	
産業考古学会全国大会開催地・中間市より ご挨拶	1
……………下山要	
【報告】	
「ヨーロッパ技術史の旅」から帰って	2
……………木元富夫	
第43回ユネスコ世界遺産委員会参加報告	3
……………市原猛志	
【追悼】	
深町純亮氏を偲ぶ	5
……………木元富夫	
【お知らせ】	
産業考古学会2019年度全国大会(中間市 大会)詳細	6
……………	

【保存要望】
 旧大牟田市庁舎本館に関する要望書…… 7
 【お知らせ】
 今後の予定 …………… 8
 会費納入・ご寄付のお願い…………… 8

第30号 2020年5月11日発行

【巻頭言】
 中間全国大会のお礼と本文原稿のご案内
 …………… 伊東孝 1

【提言】
 産業遺産学の進化と活性化へ向けて
 …………… 伊東孝 2

【研究発表】
 鉄鉱滓煉瓦研究の虚実（ドイツ鉄鉱滓煉瓦
 調査より） …………… 市原猛志 6

【記念企画】
 九州産業考古学会報 21～30号総索引 … 9

【短信】
 レール考古学のすすめ…………… 小平貴詞 13

【書籍紹介】
 花田勝広『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』
 …………… 木元富夫 15

【お知らせ】
 今後の予定 …………… 16
 会費納入・ご寄付のお願い…………… 16



□分野別索引□

【巻頭言】
 産業考古学の魅力 ……………尾崎徹也 21-1
 『熊本の近代化遺産』熊日出版文化賞受賞
 に寄せて ……………磯田桂史 22-1
 近代化遺産で先祖を思う… 時里奉明 23-1
 産業考古学と世界遺産…… 山田元樹 24-1
 「ヘリテージング」のススメ！…稲田毅 25-1
 小説の舞台を歩く…………… 砂場一明 26-1
 九州産業考古学会の魅力—現地見学会
 …………… 長妻靖彦 27-1

九州産業考古学会総会の開催を歓迎
 …………… 前園廣幸 28-1
 産業考古学会全国大会開催地・中間市より
 ご挨拶 …………… 下山 要 29-1
 中間全国大会のお礼と本文原稿のご案内
 …………… 伊東 孝 30-1

【研究発表】
 明治日本の産業革命遺産の世界遺産記載ま
 での備忘録—旧三池炭鉱における地域在住
 研究者の視点より—……………永吉 守 24-2
 南薩鉄道の鉄道遺構について—上日置駅跡
 周辺の調査結果—…………… 有木道則・
 成田浩・中原昌一・堀田和弘・大田治彦 26-5
 南薩鉄道の鉄道遺構について—上日置駅跡
 周辺の調査結果（続報）—… 有木道則・成
 田浩・堀田和弘・中原昌一・大田治彦 27-2
 鉄鉱滓煉瓦研究の虚実（ドイツ鉄鉱滓煉瓦
 調査より）…………… 市原猛志 30-6

【報告】
 平成26年度総会 …………… 砂場一明 21-2
 三池炭鉱施設群見学会 ……藤木雄二 21-2
 「産業遺産国際会議」報告…市原猛志 21-5
 対馬の近代軍事遺跡見学記
 ……………砂場一明 22-2
 「明治日本の産業革命遺産」ICOMOS登録
 勧告に接して…………… 市原猛志 22-5
 九州産業技術史研究会紹介
 ……………市原猛志 22-6
 平成27年度総会・見学会…砂場一明 23-2
 TICCIH Lille Region 2015参加報告
 …………… 市原猛志 23-6
 平成28年度総会……………砂場一明 25-2
 佐賀地区見学会…………… 尾崎徹也 25-3
 筑豊鉱山学校・筑豊工業高校所蔵資料紹介
 …………… 松田 寛 25-5
 平成29年度総会 …………… 砂場一明 26-6
 大神回天基地跡、宇佐海軍航空隊跡見学会
 ……………尾崎徹也 26-7
 松浦地域炭鉱跡・松浦市立埋蔵文化センタ

一見学会 …………… 尾崎徹也 27-6
 韓国炭鉱事情寸感 …………… 木元富夫 28-2
 「ヨーロッパ技術史の旅」から帰って
 …………… 木元富夫 29-2
 第 43 回ユネスコ世界遺産委員会参加報告
 …………… 市原猛志 29-3

【書籍紹介】

馬場明子著『筑豊 伊加利立坑物語』
 ……………木元富夫 21-5
 後藤恵之輔著『新長崎ことはじめ』
 ……………木元富夫 22-7
 園部利彦著『日本の鉱山を巡る (上)』
 ……………木元富夫 23-7
 田中滋幸著『九州の百年企業』
 ……………木元富夫 24-6
 『福岡地方史研究』第 53 号
 ……………木元富夫 25-7
 黒沢和義『写真と証言でよみがえる 秩父鉱山』
 ……………木元富夫 26-7
 林えいだい『《写真記録》これが公害だ』
 (復刻版) ……………木元富夫 27-8
 安蘇龍生『筑豊《石炭と人々の生活》』
 ……………木元富夫 28-4
 花田勝広『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』
 …………… 木元富夫 30-15

【お知らせ他】

今後の予定／会費納入・ご寄付のお願い
 …………… 21-6、22-8、23-8、24-8、
 25-8、26-8、27-10、28-6、29-8、30-16
 産業考古学会創立 40 周年記念「近代化遺産」
 シリーズ講演会・シンポジウム…24-6
 「明治日本の産業革命遺産」関連情報…24-7
 平成 30 年度総会 …………… 26-8
 旧安川家住宅「洋館棟」の保存に関する要望書
 …………… 27-9
 令和元年度総会について …………… 28-4
 産業考古学会 2019 年度全国大会 (中間市大会)
 参加のお願い …………… 28-5
 深町純亮氏を偲ぶ ……………木元富夫 29-5

産業考古学会 2019 年度全国大会 (中間市大会) 詳細
 …………… 29-6
 旧大牟田市庁舎本館に関する要望書…29-7
 産業遺産学の進化と活性化へ向けて
 …………… 伊東孝 30-2
 九州産業考古学会報 21~30 号総索引…30-9
 レール考古学のすすめ…小平貴詞 30-13



□著者別索引□

有木道則・成田浩・中原昌一・堀田和弘・大田治彦
 南薩鉄道の鉄道遺構について—上日置駅跡
 周辺の調査結果—【研究発表】 ……………26-5
 南薩鉄道の鉄道遺構について—上日置駅跡
 周辺の調査結果 (続報)—【研究発表】
 …………… 27-2

磯田桂史

『熊本の近代化遺産』熊日出版文化賞受賞
 に寄せて【巻頭言】 ……………22-1

市原猛志

「産業遺産国際会議」報告【報告】 …21-5
 「明治日本の産業革命遺産」ICOMOS 登録
 勧告に接して【報告】 …………… 22-5
 九州産業技術史研究会紹介【報告】 …22-6
 TICCIIH Lille Region 2015 参加報告【報告】
 …………… 23-6
 「明治日本の産業革命遺産」関連情報【お知
 らせ】 …………… 24-7
 産業考古学会 2019 年度全国大会 (中間市
 大会) 参加のお願い【お知らせ】 …… 28-5
 第 43 回ユネスコ世界遺産委員会参加報告
 【報告】 …………… 29-3
 産業考古学会 2019 年度全国大会 (中間市
 大会) 詳細【お知らせ】 …………… 29-6
 鉄鉱滓煉瓦研究の虚実 (ドイツ鉄鉱滓煉瓦
 調査より) 【研究発表】 …………… 30-6

九州産業考古学会報 21～30 号総索引【記念企画】 30-9

伊東孝

中間全国大会のお礼と本文原稿のご案内
【巻頭言】 30-1
産業遺産学の進化と活性化へ向けて【提言】
..... 30-2

稲田毅

「ヘリテージング」のススメ！【巻頭言】
..... 25-1

尾崎徹也

産業考古学の魅力【巻頭言】 21-1
佐賀地区見学会【報告】 25-3
大神回天基地跡、宇佐海軍航空隊跡見学会
【報告】 26-7
松浦地域炭鉱跡・松浦市立埋蔵文化センター見学会【報告】 27-6

小平貴詞

レール考古学のすすめ【短信】 30-13

木元富夫

馬場明子著『筑豊 伊加利立坑物語』【書籍紹介】 21-5
後藤恵之輔著『新長崎ことはじめ』【書籍紹介】 22-7
園部利彦著『日本の鉱山を巡る（上）』【書籍紹介】 23-7
田中滋幸著『九州の百年企業』【書籍紹介】 24-6
『福岡地方史研究』第53号【書籍紹介】 25-7
黒沢和義『写真と証言でよみがえる 秩父鉱山』【書籍紹介】 26-7
林えいだい『《写真記録》これが公害だ』（復刻版）【書籍紹介】 27-8
韓国炭鉱事情寸感【報告】 28-2
安蘇龍生『筑豊《石炭と人々の生活》』【書籍紹介】 28-4

「ヨーロッパ技術史の旅」から帰って【報告】 29-2
深町純亮氏を偲ぶ【追悼】 29-5

下山 要

産業考古学会全国大会開催地・中間市より
ご挨拶【巻頭言】 29-1

砂場一明

平成 26 年度総会【報告】 21-2
対馬の近代軍事遺跡見学記【報告】 22-2
平成 27 年度総会・見学会【報告】 23-2
平成 28 年度総会【報告】 25-2
小説の舞台を歩く【巻頭言】 26-1
平成 29 年度総会【報告】 26-6

時里奉明

近代化遺産で先祖を思う【巻頭言】 23-1

長妻靖彦

九州産業考古学会の魅力—現地見学会【巻頭言】 27-1

永吉 守

明治日本の産業革命遺産の世界遺産記載までの備忘録—旧三池炭鉱における地域在住研究者の視点より— 24-2

藤木雄二

三池炭鉱施設群見学会【報告】 21-2

前園廣幸

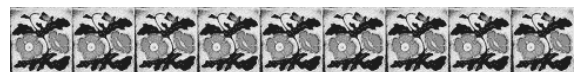
九州産業考古学会総会の開催を歓迎【巻頭言】 28-1

松田 寛

筑豊鉱山学校・筑豊工業高校所蔵資料紹介【報告】 25-5

山田元樹

産業考古学と世界遺産【巻頭言】 24-1



【短信】

レール考古学のすすめ

小平貴詞（新会員）

私（おだいらたかし）は京都生まれの京都育ち、現在は滋賀県大津市に在住しておりますが、筑豊や北九州への個人的思い入れから九州産業考古学会に入会させていただきました。自己紹介を兼ねて「レールの産業考古学」への思いを述べさせて下さい。

小さい頃から鉄道好きですが、鉄道趣味と言ってもその対象は人それぞれ、かくいう私はと言うと現在の興味の対象は「古レール」です。今から20年以上前、米原駅（滋賀県）で見かけた一本の古レールがきっかけでその世界に引き込まれ現在に至っています。今まで見て来た古レールの中で九州に関係するものをご紹介します。

山陽本線の網干駅（兵庫県姫路市）から、かつて北沢産業と言う会社の貨物専用の鉄道が分岐していました。1984年（昭和59）の国鉄貨物合理化のあおりを受けて廃止となってしまいましたが、線路敷には未だレールなどが一部残っている状態です。その中には1916年アメリカ製でロシア向けのレールなど、大変興味深いものものありますが、それは九州とは無関係なので割愛します。北沢産業は現在も盛業中で、網干駅の南側でパーキングも経営しています。その敷地内にかつて使われていたディーゼル機関車DB2（実態は貨車移動機）が保存されているのですが、そのDB2が乗っているのが、かつて九州鉄道（Ⅱ）が使っていたレールです（下写真）。

ご存知かと思いますが、「（Ⅱ）＝2代」



写真 1922年ドイツG.H.H.社製、九州鉄道（Ⅱ）の75ポンドASCE型レール

が付いた九州鉄道（Ⅱ）とは、1907年7月の国有化で現在のJR九州の基礎ともなった1888年創立の（初代）九州鉄道ではなく、1942年に誕生した西日本鉄道の前身会社の1つを指します。この九州鉄道（Ⅱ）は、1914年に筑紫電気軌道としてスタートし、1922年に九州鉄道に社名変更し、現在の西鉄天神大牟田線を建設し運営していました。

このレールで面白いのは、写真右端にある社章が上下逆様に入っていることです。またG.H.H.社は八幡製鉄所とは切っても切れない縁があることも皆さまご承知おきのことと思います。

このレールがなぜ北沢産業にあるのか？ その経緯は分かりませんが、九州の鉄道のレールは特に初代の場合、北海道でも確認されているのでレールの拡散は想像以上に広いものと思われます。

昨今産業遺産への関心が高まっていますが、産業考古学において古レールの位置は如何なものでしょうか？ 私は古レールも立派な産業遺産の一部であると信じてやみませんが、これまで取り上げられている鉄道遺産は建造物や構造物が大半を占め、古レールにスポットが当てられているのは、私の知る範囲では阪和線の紀伊中ノ島駅（和歌山市）ただ一つで、余りにもその地位は低いというのが率直な感想です。

確かに古レールは地味で目立つ存在ではありません。何も特別な場所に行かなくても、普段の通勤や通学に利用している駅で見ることが出来ます。それだからこそ、見られるうちに一本でも多く記録に残しておく

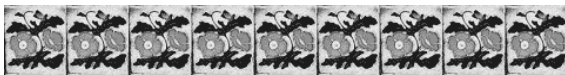
ことが大切だと常々思っています。

建造物や構造物が取り壊されるとなる

と反対運動などがニュースになったりもしますが、古レールの場合には皆無です。仲間から情報を得て見に行ったら既に改修後だったと言う経験はいくらでもあります。認知度の低さを象徴していますが、一個人の力ではどうしようもないです。できる事と言えば、先にも書いたように記録に残しておくことしかありません。もちろん現物が残ればそれに越したことはありませんが、実際のところ、ほんの一本のレールを残すにしても大変なことです。

製鉄所から出される数ある鉄製品の中で、レールほど多くの情報を盛り込んだものはほかにありません。比較的追跡調査がしやすい、とも言えるでしょう。古レールの考古学的調査は、鉄道史のみならず鉄鋼技術史などにも貢献しようと思います。

私も仲間と各地に見に行っていますが、それも少人数では限界があります。一人でも多くの方に古レールに興味を持ってもらいたい、九州産業考古学会の中で少しでも古レールの地位が向上することを願ってやみません。



【書籍紹介】

花田勝広『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』
木元富夫（顧問）

本書一副題「沖ノ島砲台と宗像」は数年前に刊行されたが「非売品」とされている。評者はたまたま地元の図書館で手にしたが、福岡ならこの図書館にもあるというものではない。しかし防衛省の防衛研究所戦史研究センター史料室の資料を駆使して書かれた本書は、福岡県や宗像地方の戦争史研究に新紀元を開くものであり、多くの図面は産業考古学徒にも裨益するところ多く、あえて紹介したい。

第1章では沖ノ島砲台が取り上げられ、世界遺産にも登録された「神宿る島」沖ノ島には、日中戦争で砲台が築かれたことが明らかにされる。第2章は筑前大島砲台で、沖ノ島と違いここは自由に上陸でき砲台跡も見ることが出来る。第3章は白島砲台、今は洋上石油備蓄基地となった白島にも砲台は築かれた。大島と白島の両方を訪れたことがある評者は興味深く読んだ。

第4章は「宗像への軍の進駐」で、芦屋飛行場、津屋崎飛行場、陸軍航空廠福岡出張所などが取り上げられる。評者に身近な福岡の弾薬庫跡や福岡駅からの引込み線跡の考証はことに興味深かった。第5章はいよいよ「宗像の本土決戦」計画。北九州の海岸に米軍が上陸するのに備え、迎撃するための教育訓練や築城作業が沿岸各地で住民を巻き込んで展開された。1945年8月には詳細かつ具体的な配置図に基づく「福岡会戦指導方策」が策定されていたというのには驚いた。決戦の舞台は西方に広がって第6章の福岡平野、第7章の糸島へと続く。

第8章は壱岐要塞小呂島砲台で、こんなところまで砲台を作っていたことに「戦争の狂気」を思う。本書を読んで評者は小呂島行きを考えたが交通事情が悪すぎて断念した。最後は終章「沖ノ島砲台と神島」で、沖ノ島の史跡としての問題性について、著者の一家言が開陳される。

著者は滋賀県在住ながら出身地宗像の歴史研究を重ねてこられた研究者である。膨大な資料が詰め込まれ、未整理のところも散見される本書は読み易いとは言えないが、評者には初めて知ることばかりで興味が尽きないことであった。なお横山尊氏による書評が『宗像市史研究』創刊号（新修宗像市史編集委員会、2018年3月）にあるが、これはウェブ（リサーチマップ）で閲覧可能である。（宗像考古刊行会、2016年、非売品）

◇◇会報原稿募集（会員外でも応募できます！）◇◇

本会報への積極的な投稿を募集します。募集原稿は【報告】（700～1400字程度）や【研究発表】（1400～2800字程度）、【お知らせ】（400字以内）など。いずれも図表挿入の場合文字数要調整。また紙面の都合上、文面等編集側で変更する場合有。詳細は学会事務局まで。

■■会報第30号・目次■■

【巻頭言】	【記念企画】
中間全国大会のお礼と本文原稿のご案内 …………… 伊東孝 1	九州産業考古学会報 21～30号総索引… 9
【提言】	【短信】
産業遺産学の進化と活性化へ向けて …………… 伊東孝 2	レール考古学のすすめ …… 小平貴詞 13
【研究発表】	【書籍紹介】
鉄鉦滓煉瓦研究の虚実（ドイツ鉄鉦滓煉瓦 調査より） …… 市原猛志 6	花田勝広『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』 …………… 木元富夫 15
	【お知らせ】
	今後の予定 …… 16
	会費納入・ご寄付のお願い …… 16

<p><謹告>令和二年度九州産業考古学会総会は春期の開催を延期します。 秋期以降の開催時期については決まり次第 Website 等でお知らせします。</p>		
今後の予定	<p>会費納入・ご寄付のお願い</p> <p>当会は年会費を個人会員 2000 円、団体会員は 5000 円をそれぞれ徴収しています。当会の趣旨をご理解頂き、会費納入或いはご寄付の程、どうぞ宜しくお願いいたします。</p> <p>会費納入・寄付先口座（一覧）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆうちょ銀行 17430-88882241 ・キューシュウサンギョウコウコカツカイ ・福岡銀行大牟田支店(店番 691) ・普通 1914369 九州産業考古学会 	
10月23日～27日		全国石炭産業関連博物館等 研修交流会（台湾）
11月6～8日		産業遺産学会全国大会（倉敷大会）倉敷市立美術館他
11月21日		空襲・戦災・戦争遺跡を考 える九州・山口地区交流会
12月		
<p><<感染症予防の観点から、イベント中止や延期の可能性がります。ご了解ください>></p>		

<編集後記>

昨年 11 月の全国大会がすでに遠い昔のような日々である。緊急事態宣言下の福岡県では、人の姿もまばらで、オリンピックなどイベント向けの熱気も消え失せ、戦々恐々といった状態である。すべての可能性が滅失してしまいそうな気分にもなるが、それゆえに、文化の力を大切にしなければならぬことは、各国からの情報発信からも明らかである。いま私たちに何ができるのか、小さな学会ながら今後の地域文化を守り続けるために必要なことを模索している。（市原）

九州産業考古学会事務局 〒811-3430 福岡県宗像市平井二丁目 12-1 砂場一明 気付
TEL&FAX : 0940-36-5501 E-mail : k-sunaba@jcom.home.ne.jp URL : <http://kias.kilo.jp/index.php>
学会ML 希望者は、上記アドレスもしくは Web 担当者 (iota_titanus@yahoo.co.jp) まで連絡願います。